

ガラス戸の内

村尾誠一著

『竹乃里歌』

明治書院 二〇一六年五月

いわく「貫之は下手な歌詠みにて、『古今集』はつまらぬ集これありそうろうに有之候」。いわく『古今集』の長歌などは箆にも棒にもかからず、「貫之とても（……）歌らしき歌は一首も相見えもうさすそうろう不申候」（『歌よみに与ふる書』）。

伝統和歌とその信奉者にたいする異例の論難だった。この挙に出たのは正岡子規、数えて三二歳のとき。俳句改革の次は、いざ日本詩歌の聖域である、和歌・短歌のうえにも新風を吹き込んでやろう、と怪気炎をあげていて、すこぶる威勢がいい。

だが、歌論はあくまで歌論。肝腎の実作はどうだったのか。子規が実際にどんな短歌を制作していたかは意外に知られていない。文学史や文学辞典の記述をみると、子規の功績は、短歌や散文にも及ぶが、根本は俳句改革を中心としたところにあつたという見方がふつうだ。ややもすると、俳人、批評家としては優れていたが、歌人としてはいまひとつという辛口の意見に出くわすことさえある。糸瓜を詠んだ絶筆三句はいずれも俳句であつたし、いかんせん、子規は俳人であるという印象が強いのだ。「おそらく短歌は子規の作品の重要な要素の一つではなかつた」（Donald・キーン）——そう割り切つて、図書館や書店で本書を見つけても、手をひっこめてしまふべきなのか。

いや、本書『竹乃里歌』たけのさとらは、俳人として世に知られる子規が、短歌の詠み手としても、やはり傑出した存在であつたことを、正しく証する一冊である。一首一首を口ずさみ、五・七・五・七・七の律動を心に高く低く響かせてみればわかるだろう。

「竹乃里歌」という歌集の名は、詩人の数ある筆名のひとつ「竹乃里人」たけのさとらひとに由来するという。このたび、明治書院の「和歌文学大系」の一冊として刊行された本書は、歌人・正岡子規の全貌を知るにはうつつつけの内容になつている。元版は明治三十七（一九〇四）年、俳書堂刊。子規の没後、自筆原稿をもとに弟子たちの手によつて編まれた歌集であつた。そのあと昭和三十一（一九五六）年、増補版が出ており、本書が底本としたのは、「正岡子規全集」として定評のある、この岩波版『竹乃里歌』のほうである。短歌二千三百首あまりをはじめ、長歌、旋頭歌、新体詩、端唄も収録。この持ち重りのする一書に、詳細な注を付し、手厚い解説を寄せたのが、中世和歌研究者・村尾誠一氏である。

それにしても、村尾誠一と正岡子規、この二人の取り合わせは意外ではないか。王朝文化の雅なる世界に親しむ村尾氏が、中世から時をうんとくだった近代の、それも「四国の猿の子猿ぞわれは」とうそぶく、俗なる前衛歌人の二三九五首（この数、ただごとではない）に綿密な注釈をあたえるとは！ 比喩が妥当であるかわからないが、村尾氏を剣客にたとえれば、これはもうりっぱな他流試合ではないか。どんな太刀をくり出してくるかわからない相手との、果てしのない番勝負といった風である。和歌の緻密な考証ぶりで知られる氏の鋭い剣さばきをもつてしても、覚悟の大仕事であつたにちがいない。

本書巻末のゆき届いた解説によれば、子規の短歌改革こそは、千年におよぶ和歌・短歌史の大きな転換点であったという。勅撰『古今集』を規範とする和歌伝統は、近世になっても「古典主義から逸脱しない故にその世界を保ち続け」、「明治を迎えても主流派の旧派歌人の手で保持され続け」てきた。要するに、時勢が幾変転しようと、歌人たちは中世和歌世界の古びた主題や言葉遣いにひたすら随順するのみであつたらしい。そのような古典主義の歪みに村尾氏はひとまず言及したうえで、伝統和歌にたいする子規の果敢な挑戦について、また歌人子規に挑む村尾氏自身の気がまえについて、次のように述べる。

それ（＝中世和歌世界）に対する反発が子規の主張であり、その実践が『竹乃里歌』の文学史的な第一の意味だということになろう。視座を換えれば、平安時代の伝統を受け継いだ中世和歌的な世界が終焉を迎えるという言い方もできる。それこそが、中世和歌の研究者である私がこの歌集に注を付すことを試みる理由である。（本書四四三―四頁）

近代のとば口まで連綿とつづいてきた中世和歌世界は、正岡子規の登場によって終焉を迎えた。『古今集』以来、さまざまな振幅のなかで、洗練と飛躍（あるいは停滞と衰退）を重ねてきた伝統の掉尾を飾る詩人、それが子規なのだ。そう考えると、定家や正徹など、伝統に立脚しながらも、前衛を自覚し、時代の牽引役たらんとした歌人たちに深く魅せられてきた村尾氏が、子規に巡り合わせたのは必然の成り行きだったかもしれない。この四国・松山生まれの文人は、破天荒や反骨心だけではない。

く、伝統的なものに対する敬意、おそるべき造詣もしつかり合わせもつていた。古典文学者・村尾誠一が腕まくりして注釈に臨むだけのことはある。

明治三十一（一八九八）年、前後十回にわたる「歌よみに与ふる書」を発表したあと、子規は本格的に短歌の実作に励むようになる。過度期ゆえか、伝統和歌の尾をひく作品もあるが、おや、これはと目を見張るのは、やはり子規自身の日常生活を素材とする歌だ。古人によつて詠まれることのなかつた心情や物象、短歌にとつていまだ拓ひらかれていない世界が、いよいよ前面に出てくる。そのあたらしさをよく表すのが、たとえば室内からながめた外の世界を詠んだ、「ガラス窓」という連作十二篇だ。そのみずみずしい描写を、いくつか具体的に見てみよう。

朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れど飽かぬかも

冬こもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ

外界に面した透明な窓があり、その向こうには世界がひろがっている。「上野の森」にさんさんと降りそそぐ陽の光も、庭の物干竿にぶらさがる「足袋」のくたびれたすがたも、まるで絵のように、まざまざと浮かび上がってくるではないか。『古今集』などを模倣するだけの旧派歌人とは一線を画する、子規ならではの精妙なまなざし・言葉づかいが、わたしたちの網膜にあざやかな視像を結ぶ。〈写生〉という美術の理念をつらぬいた子規の、面目躍如といった感じがする。

明治三十二年十二月、高浜虚子のはからいで、子規は自室の

障子をガラス戸にした。そもそもは防寒のために設えられた「ガラス戸四枚」が、思いもよらぬ眺望を室内にもたらし、子規を驚喜させる。たとえば、これも連作「ガラス窓」の一首、

窓の外の虫さえ見ゆるビードロのガラスの板は神業なるらし

を読むだけでも、まなかにひらける見晴らしに子規が目を丸くしただろうことは想像に難くない。村尾氏の語注を記せば、ビードロは「ポルトガル語を源とするガラスの別名」。神業なるらしは「当時としてはガラス窓はめずらしく、高価なものであった」とある。

むろんガラス窓という舶来の貴重品を、ただ新奇なモノとして歌題にえらんだだけなら、何でもない歌なのかもしれない。だが、子規が病臥のひとで、畳すれすれの高さから仰角ぎみの視線を外界に投じていることを思えば、胸に迫ってくるものがちがう。ほどなくして子規は、介添えなしには寝返りひとつ打てない身となる。連作「ガラス窓」から漂ってくるのは、むしろ生の悲哀のようなものだ。

最晩年の二年半あまり、病室のガラス戸を介して、子規は外界と接することができた。子規にとつて、透かし見る外の世界は、懐かしさに近い思いをさそう。上野の森も庭の草花も、子規の歌では、心なしか、異郷のように距離をおいてながめられている。おそらくそれは、外界と自身とのあいだに横たわる距離がゼロになる日は永遠に来ないと、そんな予感にたえず囚われていたからだろう。

村尾氏も指摘しているし、忘れてはならないのは、「病牀六

尺」に釘づけの子規は、「自らの生を徹底的に見つめる」しかなかったということだ。自らの生とはすなわち、子規自身の病気のことである。結核は当時めずらしい病ではなかったが、「その病によりもたらされる個人の体験はそれぞれ特殊であり、他人の想像を許さない」と村尾氏は力点を打つ。そんな誰のものでもない、誰にも渡したくない、一度かぎりの自分の人生を、子規は精魂こめて詠いあげた。それこそが短歌における子規のあたらしさだった。

この「ガラス窓」という連作が読み手の心を静かに打つのは、ひとつには、子規が心情の直接吐露を避けているからである。余人には想像を絶する肉体的苦痛のなかで、子規は嘆きもせず、恨みごともいわない。どの歌を読んでも凄惨な感じがしない。いつそ清々しいほどあつげらんとした自己把握である。そんな「ガラス窓」全十二篇のうちで、評者が一等好きなのは、物干竿に止まったカラスの目に映る子規自身のすがたを詠みこんだ次の歌だ。

物干に来居る鴉はガラス戸の内に文書く我見て鳴くか

書き物をしていて、ふと物干場に目をやると、カラスが一羽。それをみつめていた子規が、いつの間にかカラスにみつめられているという構図。つまりガラス窓という透明な仕切りを介して、みつめる主体とみつめられる客体とが、くるりと入れ替わったのだ。いともさりげなく詠んでいるが、ガラス戸の内に見えたのは、病み臥した、ふた目と見られないおのれの姿ではなかったか。こんな飄々と風に吹かれるように、それも一抹の

ユーモアを添えて詠むのは、並大抵ではない。

子規の類いまれな才能、それは自分を離れて自分を見るということだった。子規はおそらく気づいていたのだ。おのれを苛む病苦も、何者かの眼を借りて、適当な距離を置いてながめれば、そこにはある種の〈可笑しみ〉が生まれるということに。カラスに鳴かれたという短歌は可笑しい。可笑しくて、でも哀しい。親友であった夏目漱石が、小説第一作の着想の種としてそのまま拝借したといわれても、おもわず納得してしまいたいそうである。歌集『竹乃里歌』をひもとくと、こんな子規独特のユーモアも、たびたび顔をのぞかせる。

最後に申し添えておく。村尾氏による勘所をpushさせた注釈がとてよかつた。あらゆる古典に目配りできる浩瀚な知識。語釈の、一言一句にいたるまで、考え抜かれた言葉づかい。まさにこれこそ〈中世和歌研究者〉の真骨頂であると思った。

(住岳夫)